



## はじめに

1995年11月13日(月)から12月27日(水)までの一ヵ月半、韓国放送通信大学外国人研究員として同大学の番組制作の課程、番組でのディレクターと教員とのかわり、さらには新しいメディアを利用した受講生サービスの様子などを見てきた。

これらの実践は日本の通信制による高等教育やさまざまなメディアを利用したこれからの教育にも示唆を与えるものも少なくない。

以下は韓国放送通信大学の活動のレポートと日本における放送大学との比較、考察の研究ノートである。

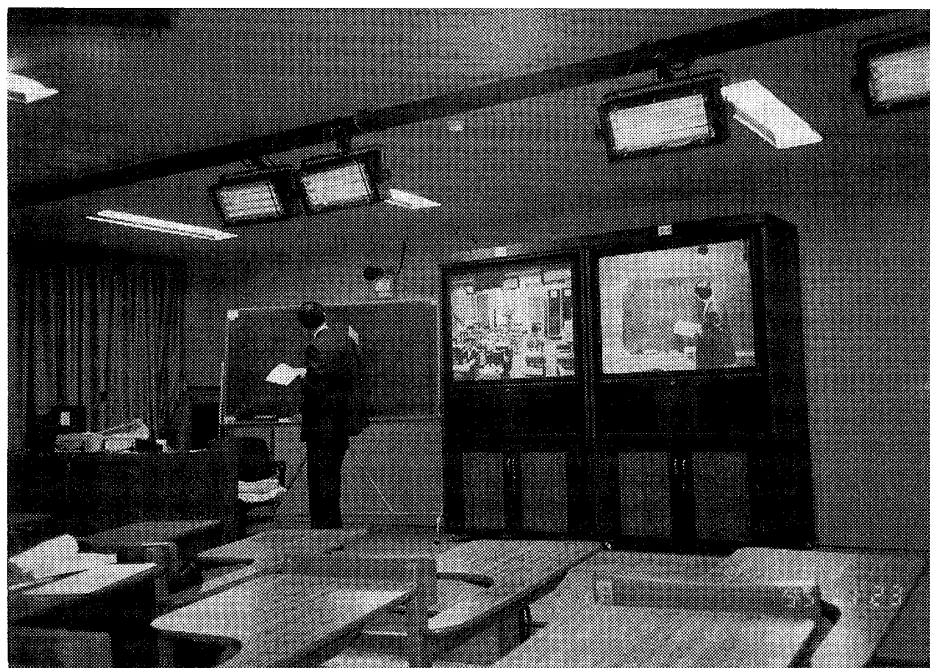
## 1. 新しい波

1995年11月29日(水)、ビデオ会議システムの開通を祝う盛大な式典が韓国放送通信大学で開かれた。きらびやかな民俗衣装をまとった女子職員たち、テレビ局のカメラマンや新聞社の記者たちでひしめきあう会場。まばゆいフラッシュがたかれる中で国務総理も出席したこの式典は30分程度で終了した。このシステムは韓国政府が160ウオン(およそ21億円)を投じて優先的に韓国放送通信大学に割り当てた、ソウルと地方の12の学習センターを光ケーブルで結ぶ双方向の会議システムである。(別図1)



ビデオ会議システム開通式典

この日の6日前、11月23日(木)早朝、私はソウルから100km程はなれた春川(チュンチェン)学習センターを見学するために列車にのっていた。漆黒の空が山の端から次第に茜色に染まっていく様はことのほか美しかった。それにソウルの街しか見たことのない私には



ビデオ会議システムによる授業風景

移り行く車窓の建物や田園風景も楽しいものだった。春川の駅で出迎えていただいた鄭さんの案内で学習センターに向かう。ここでは出来たばかりのビデオ会議システムを使って春川と江稜（カンヌン——春川よりさらに200kmばかりはなれた春川学習センターに付属のセンター）を結ぶ面接授業が始まることになっていた。

面接授業はまだテストの段階で、ここではじめて行うのだという。

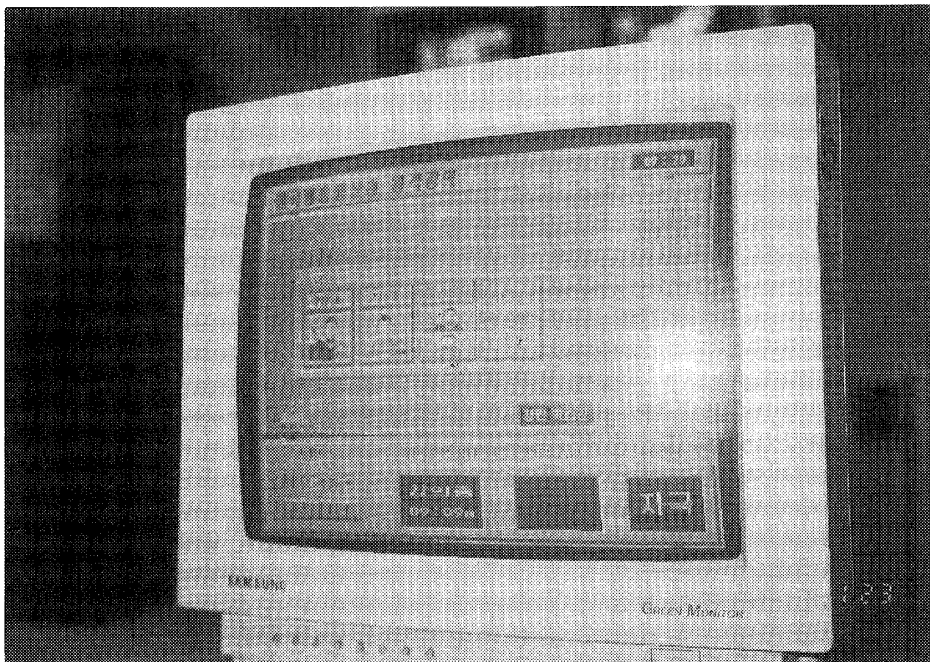
授業予定の9時になったが機械の調整に少し手間取って、5分くらいおくれて江稜との回線がつながった。受講生は春川13人、江稜3人である。鄭先生の落ちついた授業が始まった。普通の授業と異なるのは黒板の代わりに正面に50インチ程の大型テレビが2台置いてあることだ。1つは春川の授業風景を、もう一つのテレビは江稜の学生たちの様子を写し出している。

教室の隅にはテレビの映像をコントロールするアシスタントがいてコンピューターの端末からの操作によってカメラの切り換え、(教室の前と後ろに計2台ある)チルト、ズームイン、ズームバックを行い、さらにインサート用のVTRも2台、コンピューター画面をクリックするだけで写しだせるようになっている。同じような装置が講師の側にもあって、講師が自分で操作をすることもできる。映像はクリアーで遠くにいる学生も普通の面接授業を受けているような雰囲気であった。今回はテストのため2ヶ所間だけの授業であったが技術的には他の学習センター全部と授業することも可能だという。

この「テレビ会議システム」そのものはそれほど目新しいものではないが、その利点として、(1)コンピューター制御によって操作を一元化してきめのこまかい授業が出来、フェイスツーフェイスの授業に一步近ずいたこと。(2)今までは遠隔地の学生は春川のような地域学習センターに来て面接授業を受けなければならなかったのが地元で受けられるようになった。(3)将来は何箇所かの学習センターで一度に授業を行うことにより講師の負担を軽



コンピュータによる操作



同 表示画面

くすることが出来る、などが考えられる。

案内してくれた鄭さんの説明によると、当面は面接授業だけにしか使わないため放送通信大学のメインの媒体にはならないだろうということであった。しかしこのシステムが双方向性をもっているということは将来における遠隔高等教育のあり方に大きな影響を与えるものとして期待される。

このシステムはその後間もなく、授業以外に学生へのガイダンス、特別講義、学生のディスカッションの場などに広く利用されている。表1は12月にこの会議システムを利用して



VTR ラック

表1 ビデオ会議システムを用いた会議予定表 (1995年12月)

SUN		3 Regional Culture	10	17	24
MON		4 Computer Science	11 Educational Department Con- ference	18 Special Lecture (By President of KNOW)	25
TUE		5 Regional Culture	12 Operator Train- ing	19 Special Lecture (Parents Educa- tion)	26
WED		6 Student Speech	13 Operator Train- ing	20 Disccution (Administration)	27
THU		7 Discussion (Educational Revolution)	14 Information Society	21 Student Guid- ance (Effective Study Method)	28
FRI	1 Student Confer- ence	8 Korean Lan- guage	15 Brordcasting Reserch	22	29
SAT	2 Subject Lecture	9 Management Regional Culture	16 PC Communica- tion Lecture	23	30

行われたもので、ソウルにある大学本部を中心に実施された。(利用時間は1日2時間から6時間)

## 2. 韓国の番組制作

### (1) ロケーション

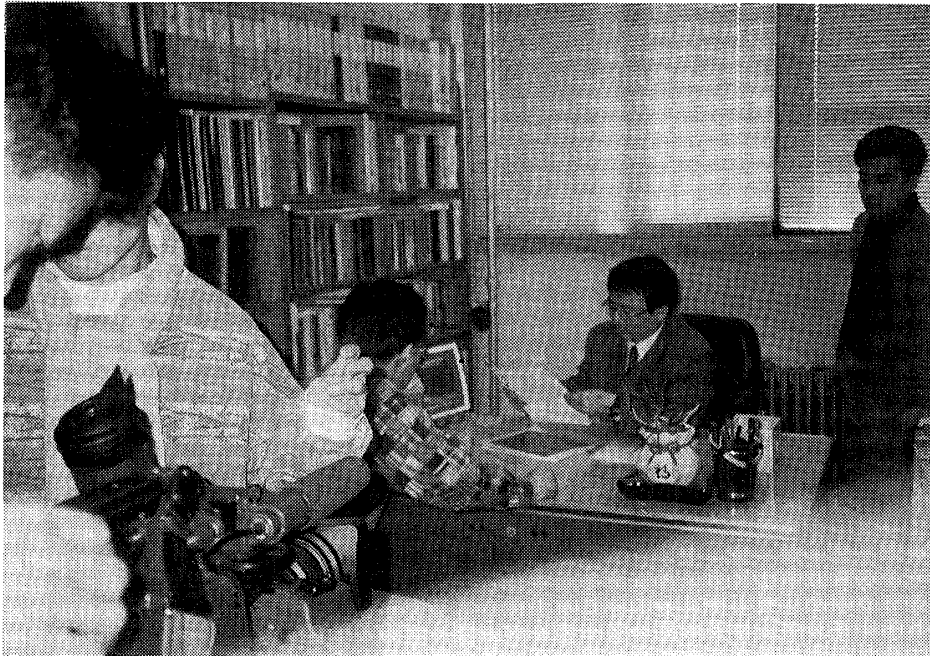
韓国放送通信大学の番組作りを実際に見学したいと申し込んだら早速丁寧なスケジュールを作ってくれた。(別表1 韓国語の読めない筆者のために漢字の文章にしてくれた。)

この予定に従って、金教授の「TVシミュレーション」の制作に参加した。

11月28日(火)、EBS<sup>(1)</sup>のロケスタッフといっしょにロケに行くことになった。ロケ先はソウル大学で、その教授の話をとりにいくということであった。韓国通信教育大学媒体研究棟に横づけになったバンに一同乗り込む。スタッフは、ディレクター、カメラマン、音声係、照明係、運転手の計5人。日本のロケーションの場合と同じである。面白いことにディレクターが運転席の隣に座るのも同じ風景である。

現場に着いての撮影風景も特に日本と変わったところはない。ディレクターが用意した何枚かの文字や図形の用紙を用いて講師がそれを見ながら話を進める。撮影は非常に手際よく進められていく。講師との事前打合せも簡単で、すぐリハーサルに入る。撮影に入ってからものの1時間もたたないうちに終了した。

ただし、持参したパターンに誤字が見つかったらどうするのだろうかと少々気になった。



ロケ風景

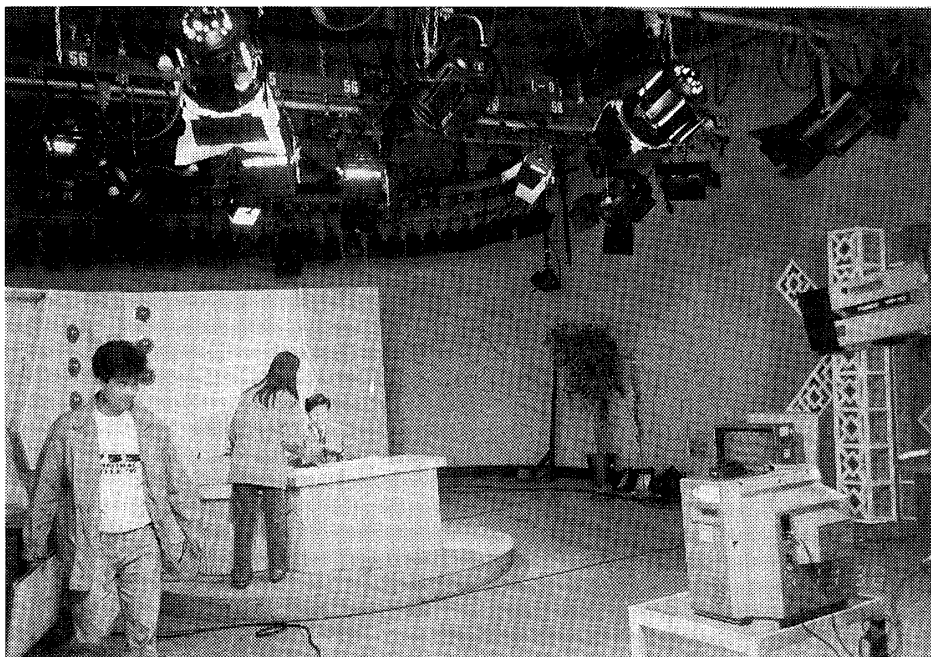
### (2) 収録

ロケの日から1日置いた30日(木)に収録が行われた。原則としてカメラは1台、台本もシート用紙に2、3枚のもの、VTRは1台収録、通し試写なし、というシンプルなもの





スタジオのサブ・コントロールルーム

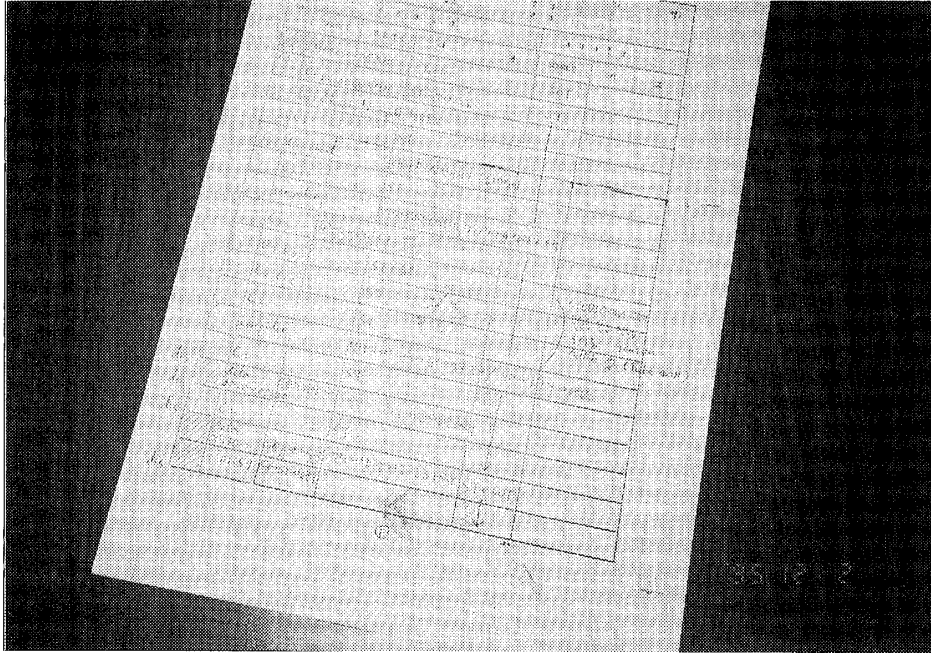


収録中のスタジオ

ある。日本のように分厚い台本を用意し、本番前日に資料を取りそろえてチェックし、当日は講師とこまかい打合せをしたり、パターンの文字を直したり、とにかく収録に入るまでに大変なエネルギーを使うのとはだいぶ様子が違う。

### (3) 演出

しかしこのことは単純な番組は良くなくて、複雑な構成番組の方が良いというつもりは毛頭無い。構成は単純であっても強く印象に残っている番組がある。その例を取り上げて



番組進行表

みたい。

それは経済学の番組であった。セットは黒板とチョーク、それに番組を聴講するための学生が数人、それだけである。何よりも新鮮に感じたのはカメラワークである。講師の動きに合わせてカメラは移動する。丁度講師の息づかいに合わせたような自然な動きである。技術的に言えばズームバック、ズームイン、トラックショット、をうまくとりいれている。学生の動きもときどき写すがこの講師と学生のやりとりも間合いに無駄がない。講師もカメラを意識していないように見える。

われわれディレクターはエキサイティングな映像、人を引きつける映像(特殊な効果、C・Gなど)を多用して番組効果を盛り上げようとする。その結果、1つ1つの要素は面白くても全体として、動きの乏しい、固い番組になっていなかっただろうか。

見るものにとって自然な状態、あるがままの状態とは何か、について考えさせられた番組であった。

それはともかくここで感じたことは、韓国と日本で仕事に対する考え方の違いである。放送(通信)大学の番組はどここの国でも一般の放送番組と違ってディレクターの、番組に対する責任の割合が相対的に少なく、どうしても講師主導型になる。ところが日本では、ディレクターは少しでも自分のイメージに番組を近づけようとして映像を多用したり、効果技法を用いたりする。一方韓国ではお互い相手のテリトリーは侵さない、という考え方に立っているように思える。

#### (4) 放送時間

現在韓国で行われている放送時間は、テレビ6時間、ラジオ49時間(いずれも1週当たり)である。(別表2、3)



日本のそれと比べて、特にテレビの時間数が少ない。しかも放送時刻の午後11時40分～12時10分という時間帯は仕事を持っている人達や高齢層にはきつい時間であろう。これは韓国放送通信大学が独自の放送局を持たず、放送をEBS（教育専門放送局）に委託しているため思うような時間枠がとれないためであろう（1995年12月現在）。そのため主に放送授業はラジオで行い、テレビはテープ視聴が多いようである。事実韓国放送通信大学ではテキスト発送と同時にカセットテープを同封している。その数は年間30万箱（1箱でテープ10本）にも達している。同じ放送主体の放送大学でも韓国ではビデオあるいはカセットテープ主体のパッケージ型に対し、日本では生放送視聴を原則としている。

### 3. 日本における番組制作

それでは日本における番組作りはどうなっているのか。以下日本における放送大学の制作の現状を見てみることにする。

#### (1) 番組の制作

放送大学は独自の放送局を持ち、大学の施設内から番組を送出している。

そして現在テレビ、ラジオ共に1日18時間の放送を行っている。

この授業番組は4年間使用することになっており、1年間に制作する番組はテレビ、ラジオおのおの約40番組である。（放送時間45分、15回で2単位）この合計80番組を26人のディレクターで制作している。（放送大学のディレクター13人、放送教育開発センターのディレクター13人——1996年4月現在——）平均すると1年間1人テレビ、ラジオ各2シリーズを担当することになる。（放送教育開発センターのディレクターは放送教育の開発研究にも携わっているため制作本数はやや少ない。なお放送大学と放送教育開発センターの関係についてはのちに述べる）

放送大学が放送を主たる授業形態とする以上、専門の知識と経験をもった制作担当者が必要である。そのためディレクターはNHKか民放のディレクター出身者で、出向か移籍したものである。さらにディレクター1人に対し外部委託のディレクターが1人、ペアになって番組制作を進めていく。各ディレクターの役割は次の通りである。

(1) 放送大学と放送教育開発センターのディレクターは基本プランに関する大学の責任が明確になるように、台本作成と番組全体を完成させる「本番収録」を担当する。

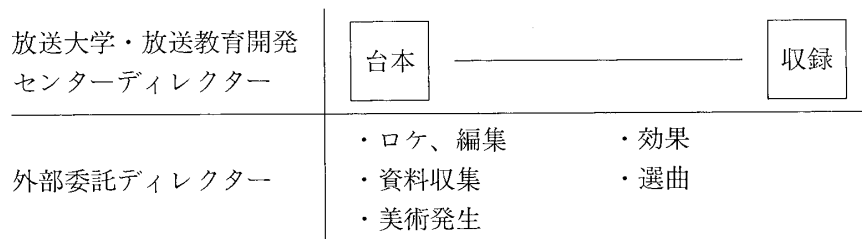
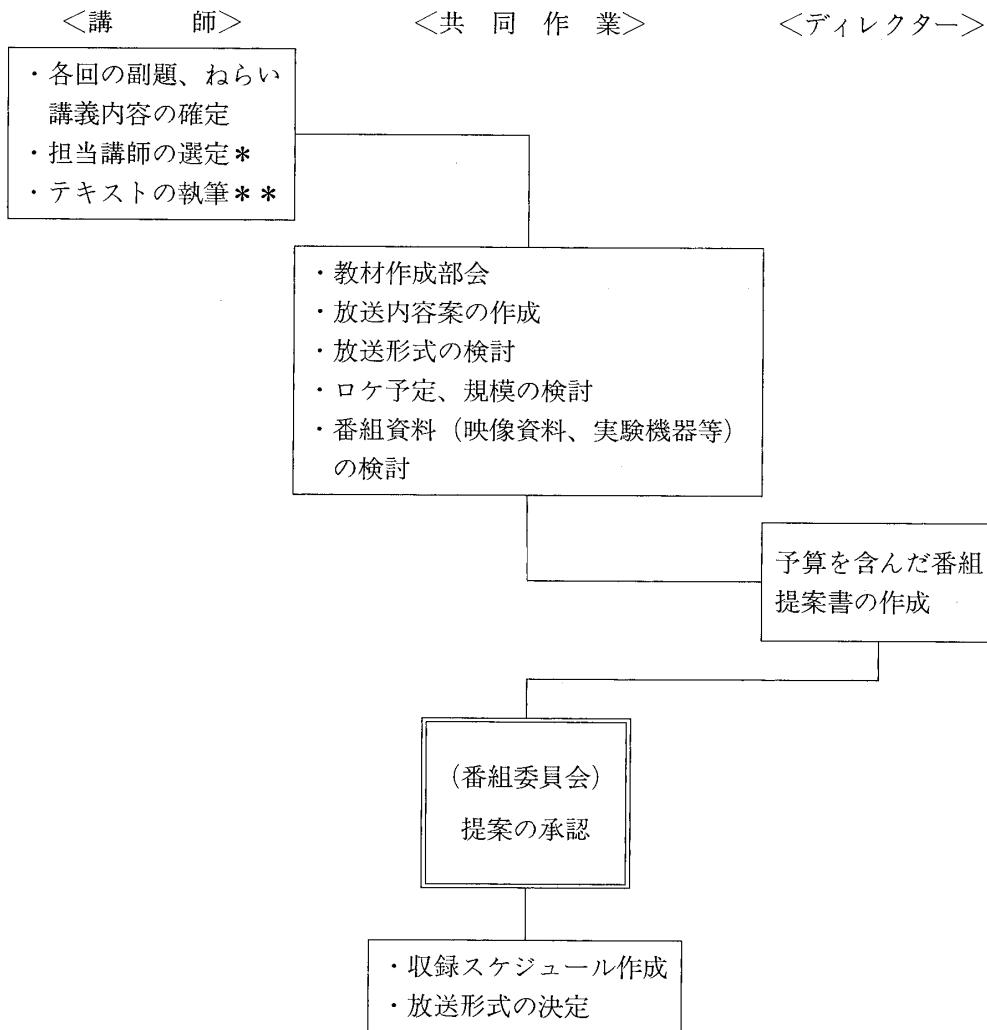


図1 放送大学・放送教育開発センターディレクターと外部委託ディレクターの役割

(2) 効率的な制作組織をめざし、番組を構成する個々の素材の制作などはすべて外部委託とする。

あらましを図式すると図1のようになる。これを見ると上段のディレクターは台本を作ればあとは収録だけ、というふうに思われがちだがそうではない。ロケーションも自分のイメージに合うように一緒に同行したり、資料収集にNHKの資料室に出向いたり、編集に立ち会ったりする。一方こうしたことは委託ディレクターの職域をおかすこともなりかねず、お互い気まずい感情にとられることもある。うまく協力し合えば良い番組になるがそうでない場合、どこまで相手の領域にふみこめるのか、普段からの話し合いが重要である。



\* ここでいう担当講師とは、放送に責任をもつ講師（主任講師という）が15本の番組のうち何本かを他の講師に依頼する場合がある。これを担当講師という。

\*\* 放送大学では印刷教材とよんでいる。

図2 番組収録に至るまでの講師とディレクターの役割

(2) 講師とディレクター

放送番組は45分、15本を1シリーズとして講師、ディレクター、技術スタッフが1つチームを組んで仕事を行う。講師とディレクターはシリーズが終わるまで変わることはない。番組チームが決まるのは制作年度（およそ放送開始の前年の4月から3月まで）の前年の夏である。チーム決定から制作に入るまでのおよそのスケジュールと役割は図2のとおりである。

この中で「共同作業」として5項目ばかり上げられているが、これは左上の講師の仕事「各回の副題、ねらい、講義内容の確定」「担当講師の選定、交渉」が済んだあとの作業であることがわかる。枠組みはすでに決まっていて、枠の中身を共同で決めようとするものである。ここでは枠そのものを変えることは出来ない。一般の放送番組との大きな違いがここにある（図3）。

一般番組では放送大学の講師の仕事がディレクターが担っていることが分かる。もちろんディレクター一人で決定できるものではないが実質的に取り仕切っているのはディレクターである。放送大学の番組は一般にどこの国でもディレクターの責任の割合が相対的に少なく、どうしても講師主導型になる。ディレクターの方は視聴者をあきさせない、興味を持ってみってくれることに力を注ぎ、映像を多くしたり、効果技法を多用したりしてメディアの特性を最大限生かそうとする。この教育としての授業を最優先するのか、メディアの特性を重視するのかの論争は講師とディレクターのあり方の問題である。

この問題を解決する一つの方法として考えられたのがイギリスのBBCを中心とした「コースチーム」である。講師、ディレクターの他に教育工学の専門家等にリーダーを加え、チームとして共同で教育計画を立てようとするものである。日本でも放送が実施される以前、1974年3月22日付けの「放送大学（仮称）の基本構想」（図4）の中にもこの名前が見

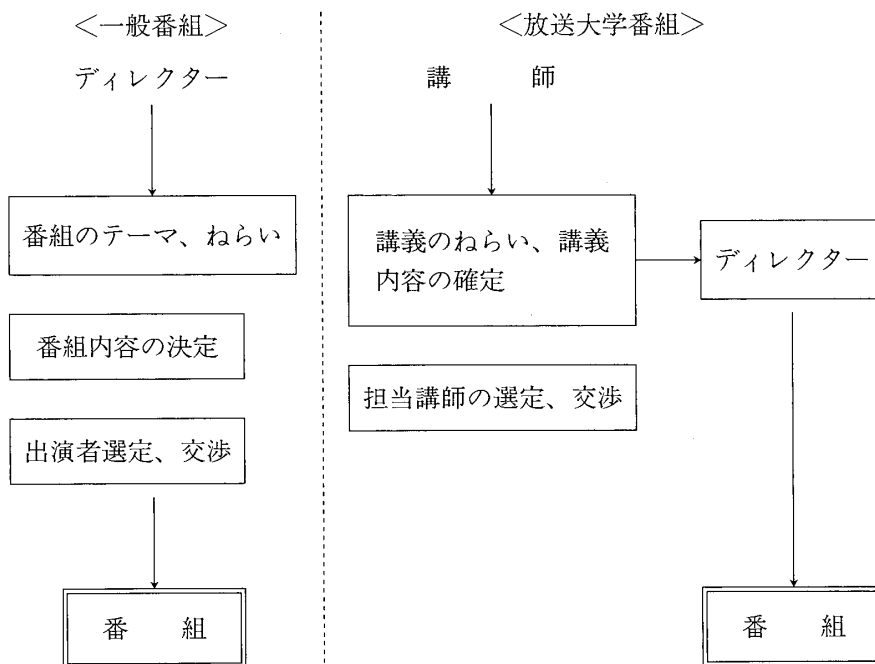


図3 一般番組と放送大学番組の違い

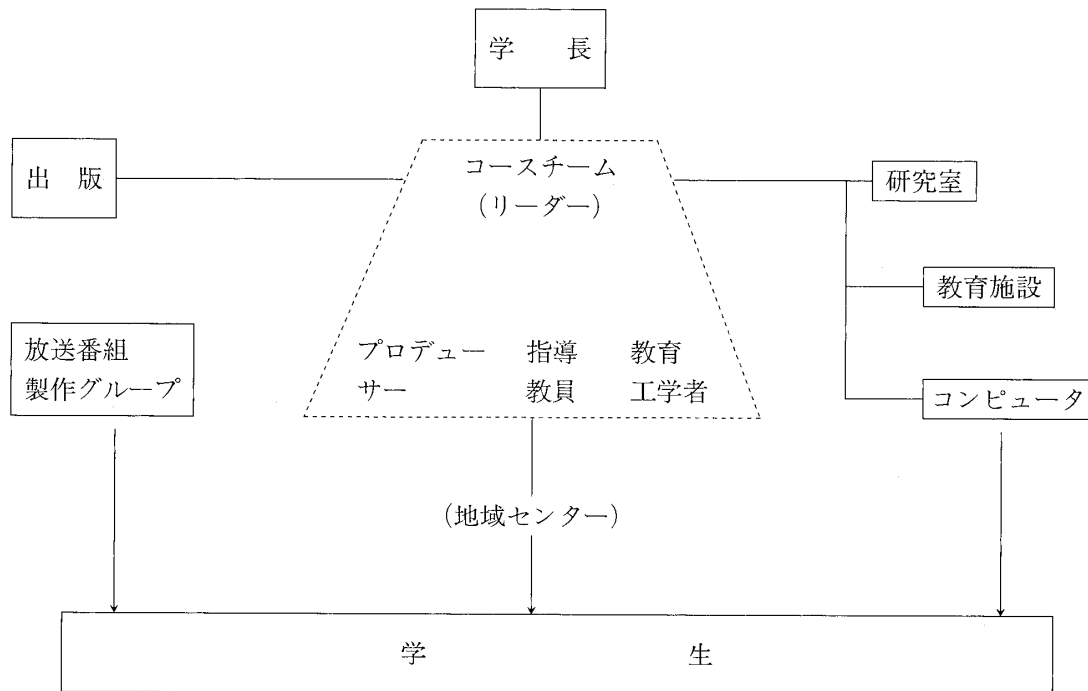


図4 「放送大学（仮称）の基本構想」に描かれた教育研究システム（一部省略）

え、コースチームが教育研究システムの重要な位置を占めていた。

実際、1985年にはコースチームを中心とした番組が制作されたこともあった。各科目ごとに主任講師、関連する分野の教員、出演講師、およびディレクターによる協力チームである。（放送大学十年史）

しかし、1年間40シリーズ、600本の番組を制作するという大量生産システムの中ではしよせん無理があり、以降この「コースチーム」制は取り入れられなくなった。

### (3) 特別講義

このコースチームの考え方とは別に、ディレクターの時代感覚に裏打ちされた企画を中心にした特別番組を制作している。放送大学では1学期のうち15週を授業番組に当て、残りの約11週を「ゆとりの期間」、「集中放送授業期間」として学生たちの教養を高めたり、再学習の機会に当てている。（表2）この期間を利用して特別番組が編成されている。例えば海外取材の折りに撮りためた映像を再構成したもの、世界の著名な学者による講演、時

第1学期	放送授業期間	4月1日～7月21日	15週間
	（ゆとりの期間）	（4月29日～5月5日）	1週間
	集中放送授業期間	7月22日～9月30日	71日間
第2学期	放送授業期間	10月1日～1月20日	15週間
	（ゆとりの期間）	（12月29日～1月4日）	1週間
	集中放送授業期間	1月21日～3月31日	71日間

表2 放送大学の放送スケジュール（1995年）

事性のあるトピックスを科学的に掘り下げた番組（「越伝導の世界」、「酸性雨」）等である。これらは1回ないし数回のシリーズとして放送され、時代のニーズに即応した番組として学生はもとより一般の視聴者も高い関心を示している。この特別番組の他にもハイビジョン番組「生命－驚異の世界」を制作したり、大型企画番組「HUMAN～人間・その未知なるもの～」の企画が進んでいる。いずれにしてもこれらの番組はメディアの特性を生かす番組としてディレクターの関心も高く、放送大学のイメージを高めるのにも役立つと思われる。

#### (4) 新しい関係をめざして

前項まで、主に講師とディレクターの関係を中心に話を進めてきた。放送教育が放送を主体とした教育であるかぎり両者の緊張状態は続くであろう。それは学問や大学が持つ「文化」と放送の「文化」の間の「文化の違い」ともいえる。

その主なものは①従来の授業は講師が一人で考え、自らの責任で授業を行う、単独の行為である。これに対して放送は、ディレクターが最終的に責任を持つとはいえ技術スタッフ、美術スタッフその他番組に携わるすべての人達の納得が得られなければ進行しない共同作業である。②大学の教員は専門分野について深い造詣を持っている。その一方で専門以外の分野については比較的関心が薄い。ディレクターの方は専門分野と言えるほどの深い知識は少ないがあらゆる分野に関心を持ち、それなりの知識がある。つまり「深くて狭い」タイプと「浅くて広い」タイプの違いである。

しかし遠隔教育の歴史は、伝統的なマンツーマンシステムによる教育に比べればはるかに短い。まだ始まったばかりと言える。講師とディレクターの連携の充実を図れば、すばらしい高等教育の果実を得られると確信している。その意味で「特別講義」のような番組を制作することは意義のあることと考える。

「特別番組」と「一般授業番組」という異なったタイプの番組が併存することでお互いの番組の質が高められ、将来はもう一度コースチーム制をめざすことができる。

## 4. 放送開発センターと放送大学

今まで述べてきたことは放送大学の番組およびそれに伴う組織やシステムの問題についてであった。日本の放送大学と、その設立から現在に至るまで密接な関係にあるのが文部省共同利用機関「放送教育開発センター」である。以下放送大学と放送教育開発センターの関係について述べる。

### (1) 放送教育開発センターの設立

1974年3月、文部省は「放送大学（仮称）の基本構想」を発表。その主な内容は、

- ・全国的な広がりを持つ1つの大学とする。
- ・設置形態は特殊法人とする。
- ・放送局の免許を受け、自ら放送番組を制作し、放送するのに必要な施設および人的組織を

持つ。  
 と言うものであった。ところが諸般の事情から特殊法人の設立が難しくなったため1978年10月、国立の「放送教育開発センター」が設置された。それにともない、以前から続けられていた放送大学実験番組は放送教育開発センターに移行され「放送大学教育実験番組」さらには「研究開発番組」として制作が続けられてきた。

つまり、放送教育開発センターはその目的が「放送を利用して行う教育の内容、方法等の研究及び開発」とされているが設立当時のセンターはこれらの研究開発に合わせて放送大学の設立準備を大きな使命としていたのである。

(2) 現在の放送大学に対する協力（放送番組）

年間の番組制作約80科目（テレビ、ラジオ各40科目）のうち7科目を放送教育開発センターが「放送教育開発番組」として制作している。本来は放送番組の制作開発や研究を行うためのものであるが同時に放送大学の通常の授業番組として利用されている。また放送大学の予算ではあるが放送教育開発センターのディレクターが制作する放送番組もある。この両方を合わせると授業番組のほぼ半分を作っていることになる。

その他放送大学番組は放送教育開発センターのスタジオで全て制作され、スタジオ使用割当の運行管理、収録用、放送用 VTR の保管、番組制作技術要員の提供を行っている。

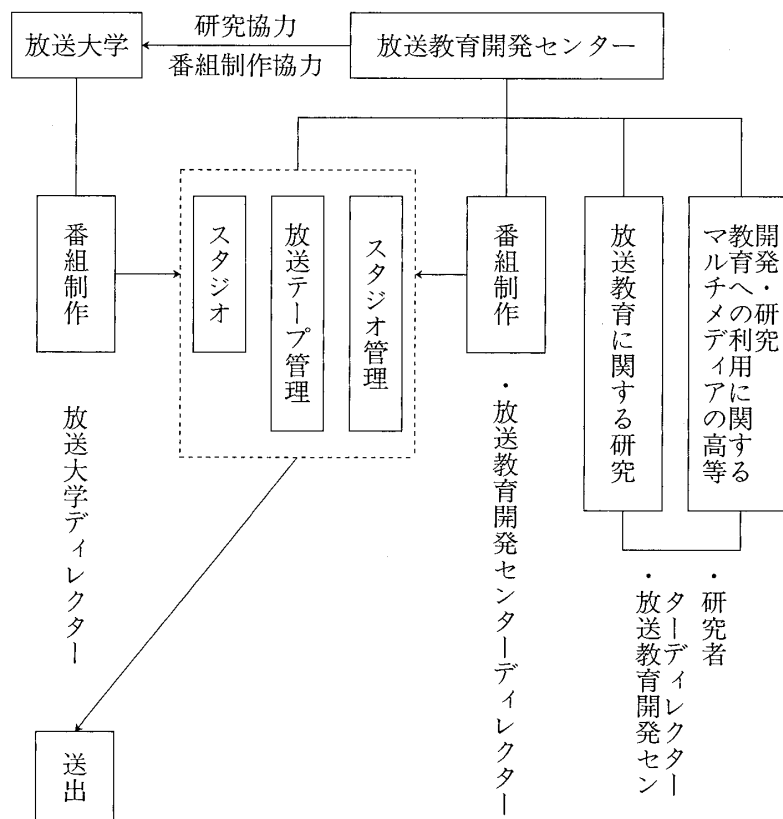


図5 放送大学と放送教育開発センターの関係



### (3) 研究・開発にともなう協力

放送教育開発センターは放送協力に関する研究・開発を通して、放送大学の運営を理論的な面から支えてきた。例えば動態調査、学習継続に関する心理学的研究、学習状況の調査研究、学習センターの現状と課題に関する研究などである。また将来の通信衛星による放送の全国化にむけての面接授業代替モデルの実験研究、テスト・バンクの開発を目的とした成績評価法の調査研究等新しい遠隔教育システムのあり方を探ろうとするものもある。(放送大学十年史)これらの研究は放送教育開発センター所属の研究者によって行われるが、ディレクターも随時さまざまな研究に参加している。そのため放送教育開発センターのディレクターは番組制作の制作者と遠隔教育の研究員(おおむね助教授)という二面を担っている。

### (4) その他の研究開発

放送教育開発センターが設立されてから21年が経過した。創設当初は放送大学を全面協力をする組織であったが現在では放送教育の研究だけでなく、広くマルチメディアを利用した高等教育への応用が研究されている。将来にわたる長期的な視点で、放送大学との関係見通しが図られている。

## 5. 韓国放送通信大学の試み

韓国放送通信大学では授業の双方向性もふまえた放送システムを取り入れようとしている。そのあらましを簡単に述べる。

### (1) CATVによる放送

1996年9月をめどにCATV一波を使って、放送を開始する。放送は一日6時間を目指す。当面は3時間の放送とする。現在放送しているEBSの放送枠はしばらく続けるという。これは前にも述べたようにEBSから放送する時間枠が少ないためTVによる放送枠を大幅に増やしたいという考え方にもとづく。

韓国における都市型CATV<sup>(2)</sup>は1996年1月5日に試験放送を始め、3月1日本放送、5月1日有料放送を開始し、同年5月15日現在、試聴世帯27万世帯、コンバーターを設置した正式な受信者は12万世帯を越えている。

しかしこのCATVにも弱点はある。a) ケーブル網が全国にくまなく行き渡る相当の時間がかかる。b) 接続料、受信料が必要であり、今までのようにテレビ受信機さえ設置すればすむというわけにはいかない。

こうしたことも考慮して韓国放送通信大学では、衛星放送を使って授業をする計画もある(3年以内に1日10時間の放送予定)

### (2) 自前の番組制作

前にも述べたように韓国放送通信大学では番組の制作にEBSに全面委託している。自

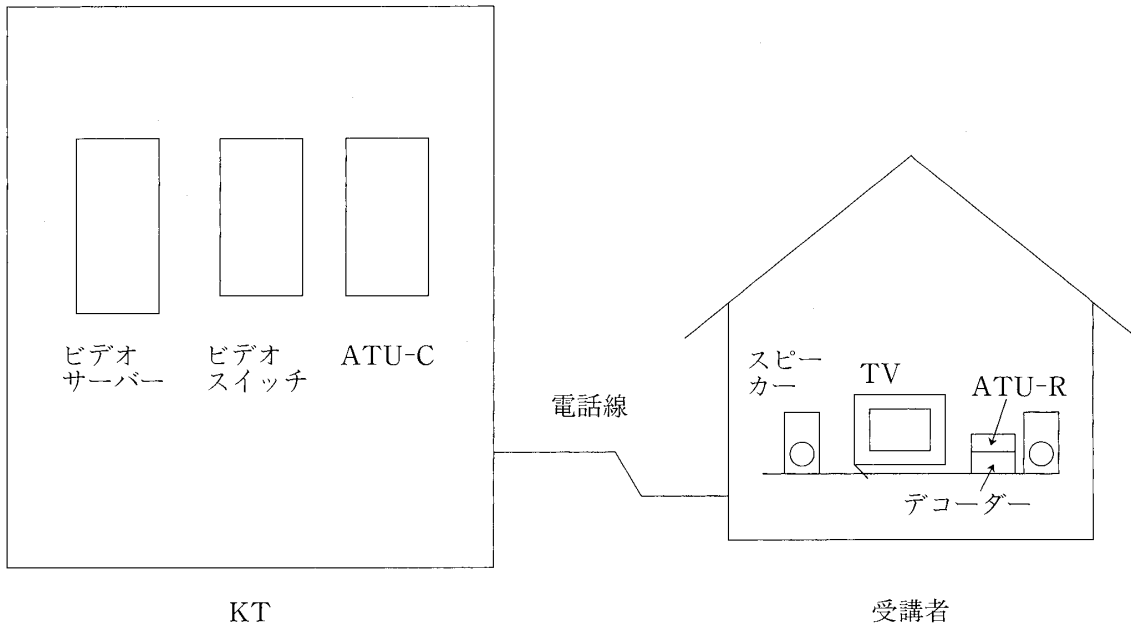


図6 VDT システム

前で番組を作りたい大学と人材を他にふりむけたいという EBS の構想が一致して、1996 年 4 月から韓国放送通信大学で採用したディレクターによって番組作りが行われるようになる。残念ながら筆者は1995年の末までしか韓国に滞在しなかったのでその後の番組作りの様子は見られなかった。経験のいるディレクターの仕事が急に交代してどのようになっているのか、機会があれば是非見てみたいと思う。

### (3) VDT の使用

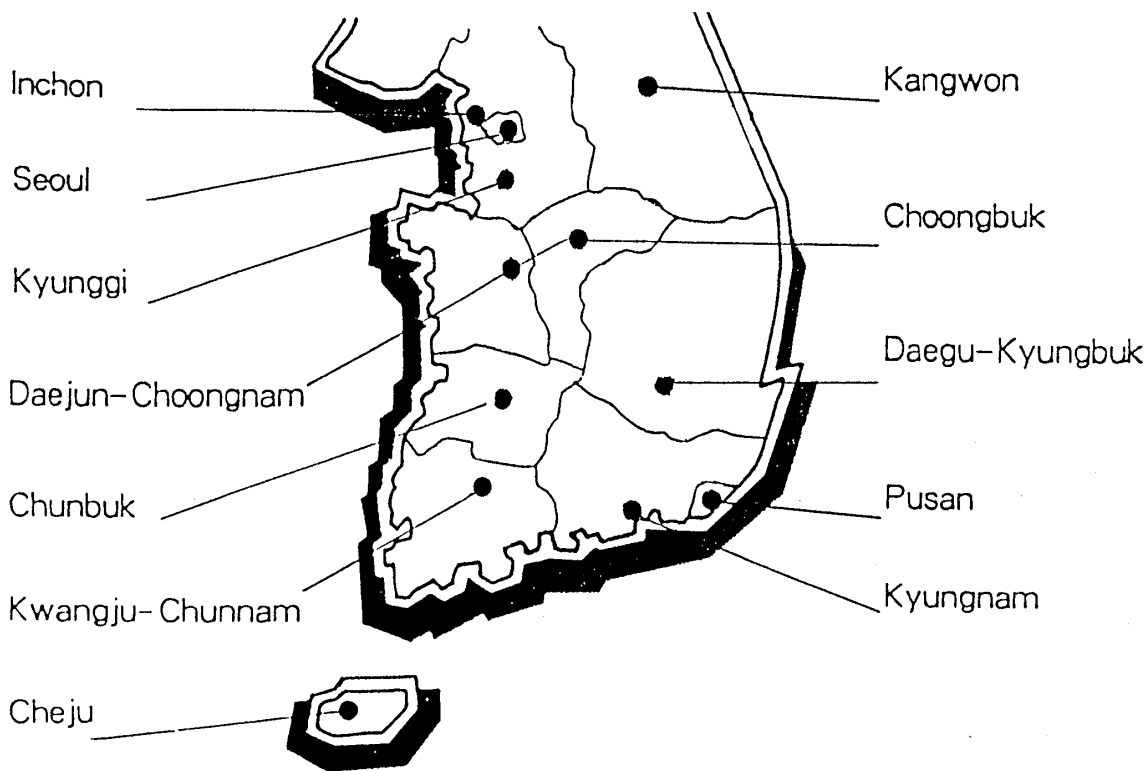
通信の双方向性をもった VOD (Video On Demand) の試みが各地でなされている。韓国でもコリアテレコム (KT-日本の NTT にあたる) が VDT (Video Dial Tone) という独自のシステムを開発して1997年から運用を始めようとしている。このシステムは VOD とほとんど同じで受信者が好きなときに好きな番組を選んで視聴できる事にある。違うところは回線に電話線を使用することである。(図6)

内容は教育、ドラマ、文化、スポーツ、旅行、映画、音楽といったものであるが韓国放送通信大学はこの教育部門の一部を使って講義を流そうというものである。とりあえず150名を対象にその効果を調べることになっている。(テスト期間中は KT が無料で提供)

## 6. 多様化するメディア

今まで見てきたようにさまざまなメディアを使った遠隔高等教育はまさに新しい時代を迎えようとしている。

日本の放送大学は1997年から通信衛星を使って全国で番組が視聴できるよう準備を進めている。また放送教育開発センターでも通信衛星を使った SCS (Space Corroboration System) で大学間の講義、セミナー等を1996年秋から実施している。さらに最近急速に発



別図1 韓国放送通信大学地域学習センター所在地

●'95年 第2學期 TV 講義 新規 製作 教科目 現況

教科目	學科	擔當教授	擔當PD	備考
保險統計	應用統計學科	李泰林	李揆玉 製作部長	
應急と災害看護	看護學科	李仙玉	鄭在喜	
TV SIMULATION	電子計算學科	金康絃 媒體開發研 究所 所長	朴明호	參觀 PROGRAM

TV SIMULATION 週間 製作 日程

- STUDIO 録畫 : 11月24日 金曜日 午後 確定 豫定
- 野外 録畫(ENG 撮影) : 11月24日 金曜日 午後 確定 豫定

●'95年 第2學期 RADIO 講義 新規 製作 教科目 現況

教育社會學、公衆衛生學、中國哲學概論、勞動法 1、食品貯藏と加工、英美散文 2  
 中國文學批評史、中國哲學概論、保險統計學、實驗計劃法、近代經濟史、法制史  
 保險海上法、生産管理、比較政府論、財政學、勞動經濟學、管理經濟學、看護指導者論  
 財務會計、貿易情報處理、實務英語、兒童臨床心理、營養學、哲學の理解  
 佛文化講讀、幼兒社會指導、現代英語、家庭園藝、生活美術

別表1 1995年2學期・韓国放送通信大学の番組収録予定 (一部)

別表2 韓国放送通信大学の放送時刻表 (TV-網かけの部分)

# '95 EBS-TV Weekly Program Schedule

( Korea National Open University)

(As of March 27, 1995)

H	M	Monday	Tuesday	Wednesday	Thursday	Friday	Saturday	Sunday	M	H	
								Korea Air & Correspondence University Lectures(30' x 3)		07	
								TV TOEIC	30	08	
								(Cartoon)(RE) Blinky Bill	10	09	
								Children Songs(RE)	35		
								Chinese Characters	40		
								Paduk Class		10	
								Sunday Lecture		11	
								Movie Classics		12	
								Travel Into History(RE)	30	13	
								EBS Music Room	10	14	
								(Cartoon)(RE) Aesop's Fables	10	15	
								Kid Can Cook!(RE)	40		
16										16	
	30	Ding-Dong-Dang TV Kindergarten									
	50	English World					Ding-Dong-Dang TV Kindergarten (Saturday Special)		Youth Plaza		
	55	Let's Make It, Together			Children Songs						
17	05	Elementary Class(1st grade)		Elementary Class(2nd grade)		(Cartoon) Aesop's Fables	(Cartoon) Blinky Bill	Cinema Paradise(RE)		17	
	20	Elementary Class(3rd grade)		Elementary Class(4th grade)				25			
	35	Elementary Class(5th grade)		Elementary Class(6th grade)		Song Of Angels	Kid Can Cook!	40			
	55							45			
18		Me and My Computer	Elementary Art Class	Elementary Music Class	Having Fun With ABC		Home Drama	Documentary Special		18	
	15	Basic Chinese Class						15			
	20	Science(Mid1)	Math(Mid1)	English(Mid1)	Korean(Mid1)	Middle School Social Science	- LIVE - Teacher! I Have a Question			30	
	40	Korean(Mid1)	English(Mid2)	Math(Mid2)	Science(Mid2)	Middle School Technology		Teachers' Hour			
19		Korean Language								19	
	05	Lessons On Caring & Love	TV Literature Lecture	TV Home Doctor	Studio With a Book		Dear Teacher			20	
	40	EBS Education News					Beyond 2000	Art Plaza			
	45	World Documentaries		Palette	Invention			00			
20	10	Economy Story		Learning Current Events	World Etiquette		Listening Special			20	
	20	One And Only Earth	Travel Into History	Cultural Cities of China	My School Days	Cinema Paradise	The Joy Of Painting	The Joy Of Painting(RE)		30	
21		German Conversation	French Conversation	Chinese Conversation	Road To Unification		World Of Vocations	Bernstein's Young People's Concert		21	
	25	Japanese Conversation		Business English				50			
	50	English Conversation					College Introduction				
22	15	Columns From Distinguished Persons							15 Basic English		22
	20	TV High School Classes							20		
23	40	Korea Air & Correspondence University Lectures							Korea Air & Correspondence University Lectures(30' x 3)		23
24	10								00		24

(appendices 3)

別表3 韓国放送通信大学の放送時刻表 (FM-網かけの部分)  
 '95 EBS-FM Weekly Program Schedule

(As of February 27, 1995)

(  Korea National Open University)

H	M	Monday	Tuesday	Wednesday	Thursday	Friday	Saturday	Sunday	M	H	
05		Korea Air and Correspondence University Lectures(30'×4)									05
06		Korea Air and Correspondence University Lectures(30'×4)									06
07	15	TOEFL Lesson						TOEIC Lesson		07	
	30	English Conversation									
	45	Japanese Lesson									
		Easy Chinese									
08	20	Pop Music English						Society of Love	30	08	
	40	Guten Morgen			Bonjour La France						
		Spanish Lesson			Russian Lesson						
09	05	Today's Meditation						My Music Life		09	
	10	Basic Korean Language									
		Classic Music									
10	10	Elementary Class(1st grade)			Elementary Class(2nd grade)			Family Of Love		10	
	25	Elementary Class(3rd grade)			Elementary Class(4th grade)						
	40	Elementary Class(5th grade)			Elementary Class(6th grade)						
		Forever Young									
11		Parents' Hour						Seminar Broadcast		11	
12	20	Pop Music English(RE)						World Of Music		12	
	35	English Conversation(RE)									
13	20	Children Songs						Traditional Korean Folk Songs		13	
		Korean Folk Music									
14	10	Interesting Stories						Road To Unification		14	
	15	Teaching Of Moral Behavior									
	20	Tell Me Why									
	40	Childrens Writings		Building Up Logic		Great People Story		Drawing Skills	30		
	50	Elementary English						Green, Green Earth	40		
		Elementary Class(1st grade, RE)			Elementary Class(2nd grade, RE)						
15	15	Elementary Class(3rd grade, RE)			Elementary Class(4th grade, RE)			— LIVE — Teacher! I Have A Question		15	
	30	Elementary Class(5th grade, RE)			Elementary Class(6th grade, RE)						
		Afternoon Music									
16	25	EBS Educational News							16		
	30	Teachers' Hour				My Teacher. The Best					
17		Korea Air & Correspondence University Lectures(30'×6)									17
18		Korea Air & Correspondence University Lectures(30'×6)									18
19		Korea Air & Correspondence University Lectures(30'×6)									19
20	40	Middle School Home Studies(20'×2)						Youth Parade		20	
		Middle School English Listening		High School Korean Listening		High School English Listening					
21		Air & Correspondence High School Lectures(20'×6)									21
22		Air & Correspondence High School Lectures(20'×6)									22
23		Korea Air & Correspondence University Lectures(30'×4)									23
24		Korea Air & Correspondence University Lectures(30'×4)									24

(appendices 4)

展してきたインターネットを使って遠隔教育を行うことも可能である。今までには考えられなかった新しい教育の波である。

しかしこうした新しい技術が何処まで定着するのはまだ定かではない。利用目的によってうまく使い分けていくのか、淘汰されるものが出てくるのか、これからの運用にかかっているといえよう。

<注>

1) EBS (Educational Broadcasting System)

韓国文教部 (Korean Ministry of Education) 直轄の教育放送専門局。1990年12月、国の中央教育機関である韓国教育開発院 (Korean Educational Development Institute, KEDI) の教育番組部門と韓国放送公社 (KBS) の教育番組チャンネル (テレビ3チャンネル、FM1チャンネル) が一緒になって設立された。1991年11月放送開始。

韓国放送通信大学は EBS に番組スタッフの提供を受け、番組制作、放送の委託を行っている。

2) 都市型 CATV

従来からあった有線による農村型放送に対して付けられた名前。一度に数十チャンネル見ることが出来る。

<参考文献>

秋山 隆志郎他 (1993) 「韓国の放送教育」-放送教育の国際比較研究の試み-日本視聴覚・放送教育学会

鄭 東熙他 (1992) 「韓国放送通信大学の20年」-遠隔高等教育の国際比較研究(韓国)班-放送教育開発センター 034-J-92

橋本 秀一「韓国ケーブルテレビ事業の理想と現実」~金光植 韓国綜合有線放送協会副会長の講演から~ 海外メディア調査レポート NO14

放送大学学園編 (平成6年) 放送大学十年史

李 知洙 「韓国放送通信大学の社会的役割」 放送教育開発センター 研究資料 046-J-94